



『古今和歌六帖標柱』 翻刻(七)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 一男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005180

『古今和歌六帖標注』翻刻（七）

北海道教育大学旭川校国文学教室

伊藤 一男

○本稿は、『古今和歌六帖標注』翻刻（二）（『旭川国文』第一三三号 一九九七年一月）『古今和歌六帖標注』翻刻（二）（『語学文学』第三六号 一九九八年三月）『古今和歌六帖標注』翻刻（三）（『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』第四九巻第一号 一九九八年八月）『古今和歌六帖標注』翻刻（四）（『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』第五〇巻第一号 一九九九年八月）『古今和歌六帖標注』翻刻（五）（『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』第五一巻第一号 二〇〇〇年八月）『古今和歌六帖標注』翻刻（六）（『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』第五一巻第二号 二〇〇一年二月）を受けるものである。

古今和歌六帖第二

山

やま 山どり さる しか とら くま むさ、び 山川
山田 山さと 山のぬ やまびこ いはほ 峯 たに そま

をの、え すみかま せき 原 をか もり やしろ みち
つかひ うまや

田

春の田 夏の田 秋の田 冬の田 かりほ いなおほせ鳥
そほづ

野

春の野 夏の野 秋の野 冬の野 ざふの野 かり ともし
わし 大鷹 小鷹 きじ はと うづら 大鷹がり

小鷹かり 野辺 みゆき

都

みやこ 都とり も、しき

田舎

くに こほり さと ふるさと やど やどり かきほ

家

家 となり 井 まがき 庭 にはとり かど と

すたれ とこ むしろ

人

おきな おんな おや うなる わかいこ くるま うし

うま

仏事

寺 かね ほうし あま

山

八元 おほなむちすくなちひさみかみ拾・九び拾・九こ拾・九なの作りたるれりし拾・九いも拾・九せの山をぞうれしき拾みるはかうれしき九しもよし

人麻呂

〈万七 (三三七) ・拾神楽 (六二九) ・『人丸集』 (一三三・二〇九・三六〇) 〉

【頭】『万葉』三 (三三五) 生石村主真人

大汝少彦名乃将座志都石室者幾代将経

契冲云『神代紀』に、大己貴命、少彦名命とともに天下を経営し給ふよしあれば、かくならべ申せるなるべし。

△〇 みむろのやその山なかにこらが手をまき向山はつぎてよろしも

〈同 (二〇五) 〉

ひとまろ

△一 いはがねのこ、しく山にいり初て山なつかしみいでがてぬかも

〈同 (二三七) 〉

人丸

△三 かね山のしたびが下に鳴かはづ声だに聞ば何かなげかん

〈同十 (三三九) 〉

【頭】『万葉』に「金山」とありて「あきやま」とよめり。それよろし。

【春秋繁露】云「金者秋殺氣之始也」。

【文選】張景陽雜詩云「金風扇素節」。【李善注】云「西方為秋、而主金、故秋風曰『金風』」。

△三 さばやまをよそにみしかどけふみれば山なつかしみ風な吹そも

〈同七 (三三三) 〉

△四 なぐさ山ことにし有けり我恋のちへのひとへもなぐさまなくに

〈同 (三三三) 〉

をだのことぬし〔伝未詳〕

【頭】『万葉』には「小田事」とありて「主」の字なし。契冲云『万葉』

異本及『六帖』に「事主」とあるぞよろしかるべき云々。

△五 槇の葉のしなふせの山しのばずて我越くればこのはしりけん

〈同三 (三九二) 〉

大伴郎女

△六 我せこがにいるさの山の山あらしきてなとりふれそかもまさるか

〈催〉

石河郎女

△七 わがせこをこませの山と人はいへど君もきませぬ山の名ならし

〈万七 (二〇七) ・拾恋三 (八八) 人丸〉

【頭】契注云「大和のこせ山を「こちへこせ山」とつゞけたり」。第三帖川 (三五三)、

をちへゆくこちこせ川にたれしかもいろとりがたきみどりそむらん

△八 するがなるうつのを山のうつ、にも夢にもみぬに人の恋しき

〈新古今羈旅 (九四) ・伊 (二二) 〉

△九 かしまなるつくまの山のつくぐくと我身ひとつに恋をつむかな

〈拾恋五 (九九) よみ人しらず・寛 (二七) ・新万 (二〇三) 〉

【頭】異本『元輔集』 (一四二) つくば山つくぐく物をおもふかなさみを見ざらんほどのこころを

△四 大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代の蔭みん

〈後賀 (三三) 貫之・金玉 (七) ・家 (一六九) ・二五五・第六 (四〇七) 重出〉

ゆげのわうじ

八四 瀧の上のみふねの山にゐる雲の常ならんとは誰かたのまん

〈第一（五二） 已出〉

たゞみね

八四 きみが代にあふ坂山の石清水木がくれたりと思ひける哉

〈古雑体（二〇四）・家（I・二・II・III・IV）・第三（四四）重出〉

八四 みよし野のよしの、山は百とせの雪のみつもとるところなりけり

〈『貫之集』（I・七）〉

八四 すがはらや伏見のくれに見わたせば霞にまがふをはつせのやま

〈後雑三（三四）よみ人しらず〉

【頭】伏見といふ所、山城にもあれど、こゝは大和なり。その事は、『袖

中抄』卷十二にいはれたり。

【古今】雑下（九二）

いざこゝにわがよはへなんすかはらやふしみのさとのあれまくもをし

八四 しら山に雪ふりぬれば跡たえて今は越路に人もかよはず

〈同冬（四七）・大（二四）〉

八四 妻かくすやの、神山露じもに匂ひそむらし散まくをしみ

〈万十（三三）・玉秋下（七五）人丸・夫雑二山（八五）（人丸）〉

【頭】契注云「やのといふ所、国々にあり、いづれともさだめがたし」。

八四 東路のさやの中山さやかにみぬ人ゆゑに恋やわたらん

八四 みまさかやくめのさら山さらく〜に我名はたてじ万代までに

〈古大歌所（二〇三）・催〉

【頭】『万葉』十四（三七）

多麻河左良須弓豆久利左良左良奈仁曾許乃兒乃己許太可奈之伎

【伊勢集】（I・三九・II・四〇・III・四四）

みまさかやくめのさら山さらく〜にむかし〜のこひしきやなぞ

たじまの皇女〔天武天皇御女〕

八四 雲のうへに鷹ぞ鳴なるうねび山みかきの原に紅葉すらしも

〈夫秋六紅葉（六六七）家持・『家持集』（I・一九・II・四七）〉

【頭】『家持集』（I・二〇・II・四八）

大ぞらにかりぞ鳴なるうねびやまみかきはらにもみぢしぬとか

読人しらす

八四 しなが鳥のな野をゆけば有馬山霧立わたり明ぬこのよは

〈万七（二四）・新古鞆旅（九〇）・夫雑二山（七六）・古本『猿丸集』

（I・七・II・四）〉

八四 矢田の野のあさぢ色付あらち山峯の沫雪さむくぞ有らし

〈同十（三三）・同冬三雪（七四）・『人丸集』（I・二五・II・二七・III・二五）〉

八四 飛鳥河もみぢ葉流るかづらきや山には今ぞ時雨ふるらし

【頭】『古今』秋下（二六）よみ人しらず

立田川もみぢばながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

八四 なる神の音にのみ聞巻向の松原の山をけふみつるかな

〈万七（二五）・拾雑上（四六）人丸・夫雑二山（八五）・『人丸集』（I

三二・II 二九・III 六二

八五 いちじろく時雨のふればつくしなるおほの、山もうつろひにけり

〈同十 (三九)〉

八六 世をうしといとひし人は神なびの三室の山に入にけるかも

〈夫雑二山 (八四) よみ人しらず〉

八七 もの、ふの立といふなるすか山ならんかたこそ聞まほしけれ

【頭】「軍防令」云「凡置_レ関_二守固_一者、並置_二配兵士_一、分番上下。其

三関者設_二鼓吹軍器_一云云。【義解】云「三関者謂伊勢鈴鹿、美濃不破、越前愛発等は也」などみえたるごとく、鈴鹿にはむかし関をおかれ、武士多くつかはされてまもらしめ給ひし故に、「もの、ふのたつといふなるすか」とはつつけしなるべし。

かこの山のはな

八八 風吹ばおきつしら浪たつたやま夜半にや君がひとりゆくらん

〈第一 (四六) 已出〉

八九 いにしへのことはしらぬを我みても久しくなりぬ天のかご山

〈万七 (二六)・続古雑下 (二四) よみ人しらず・古本「人丸集」(II 二五)〉

たけちのくろ人 (伝未詳)

九〇 わぎも子にゐな野はみせつなづき山角の松原いつしかゆかん

〈万三 (三七)〉

九一 逢ことを遠江なるたかし山たかしゃむねにもゆる思ひは

〈夫雑二山 (八五) よみ人しらず〉

【頭】「和名抄」三河国渥美郡郷名に「高蘆(多加之)」。たかし山はそこなるべし。『源光行紀行』には、「三河と遠江のさかひにたかし山といふあり云々」。今按ずるに、三河と遠江とのさかひにある山なれば、昔は三河に属、このころは遠江につきたるなるべし。

九二 かくらくのときまの山のやまぎはにいざよふ雲は妹にかもあらん

〈万三 (四六) 人丸〉

【頭】仲実朝臣『綺語抄』云「己母理久乃波都世」とみえたるよろし。

九三 ますかみみなぶち山はけふもかも白露おきて紅葉ちるらし

〈同十 (三〇)・夫雑二山 (八六) よみ人しらず・古本「人丸集」(II 三三)〉

九四 ぬば玉の黒髪山をあさこえてこのした露にぬれにけるかも

〈第一 (五九) 已出〉

九五 夏衣かたしき山のほと、ぎすなく声しげく成まさるなり

〈拾夏 (三三) よみ人しらず・亭 (九)〉

いちはらのおほきみ

【頭】こゝに「いちはらのおほきみ」とあるは誤れり。【古今】に「みつね」とあるぞよろしき。

九六 かへる山何そはありてあるかひはきてもとまらぬ名に杜有けれ

〈古離別 (三六) みつね〉

九七 しのぶやま忍びて通ふ路もがな人のこゝろのおくもみるべく

〈新勅恋五 (四) 業平・伊 (三三)〉

八〇 みな月のなごしの山の呼子鳥大祓にのみ声の聞ゆる

〈夫春五呼子鳥（二八六）よみ人しらず〉

八六 我おちひらびや新・家こふるみの、を山のひとつ松むすび夫ちぎりし心こはいつも新今もわすれず

〈新古恋五（二四〇）伊勢・家（一六一・二五五・三四三）・夫雜十一松（三三六）よみ人しらず〉

八九 しらま弓但馬いるさのやまのときはなる命かあやな恋つ、を万てやあらん

〈万十一（二四四）・夫雜三山（八五）よみ人しらず・『家持集』（二二六）〉

【頭】契沖云「しらま弓」のうた、『万葉』には「いそべの山」とあり。『万葉』の前後、みな近江なれば、いそべの山も近江なるべし。

八七 我恋はみくらの山山城にうつしてんほどなき身には置所なし

【頭】『古今』恋四（七六）典侍よるか

たのめこしことのは今はかへしてん我身ふるればおき所なし

八七 津の国の待かね山の呼子鳥なけど今は夫といふ人もなし

〈夫春五呼子鳥（二八七）よみ人しらず〉

人麻呂

八三 春草をうま山城喰山をこえてくるかりの使はやどりすぐ也

〈万九（二七〇）・奥（四四）〉

八三 よの中をなげきにくゆるかまつぶり夫と山はれぬ思ひを何しそめけん

〈夫雜二山（八三三）よみ人不知〉

八四 しをりしてゆかましものを会津山君陸奥にしあらねば猶は夫・イぞ恋は夫しき

〈同（八七七）〉

【頭】「いるよりまどふ」と『夫木』にある正し。按ずるに、今一首、

八五「おもひいでてみちきつれどもみかはやま」君にしあらねば（なほぞこひしき）

のうた有けんを、一首を一首にうつしひがめたるなるべし。

八六 いは陸奥で山陸奥いはでながらの身はのはてはおもひしこと、誰きかつげまし

八七 小倉山山城みねふみならしきにしかばけふは何ともおもほえぬかな

いせ

八八 みわの山大和いかに待みんとしふともたづぬる人もあらじと思へば

〈古恋五（七〇）・金玉（三三）・家（一三・二五・三三）・卅（三七）・第五（二八七）重出〉

貫之

八九 音羽山山城おとに聞つ、相坂の関はのこなたに年をふる哉

〈同恋一（四七）元方〉

九〇 後瀬山若狭のちも逢あはん万みんとおもへばかた新ぞしぬべきものをけふまでもあれ新ふる

〈万四（七五）家持・新拾恋四（二二三）〉

素性

九一 鏡山あしひきの拾やまかきくもりしらし貫之集ぐるれば紅葉あかくそあきはみえける後たる家は猶いづくも拾も照あまさりけり

〈後秋下（三五）素性・家（一五・二四）・拾冬（三五）貫之・『貫之集』（一七）・第六（四六九）重出〉

九二 おほ紀伊ば山霞さよかけ万たな引風さよかけ万ふきて我はふねとめはん泊はしらずも

へ万七 (二三四) ・夫雜二山 (八五四) よみ人しらず・第三 (二七九) 重出

【頭】『万葉』九 (二七九) 春日蔵歌

テルツキヲクモナカクシノシマカケニワガフネハテントマリシクズモ
照月遠雲莫隠鳥陰尔吾船将極留不知毛

八三 倉橋大和の山の雪にもあらなくにまづ人さきに身のふりぬらん

八四 すみ染のくら山城まの山に入し人まどふ後・大もかへりきな、ん

へ後恋四 (八三三) 平なかきが娘・大 (二五九) へ

喜撰法師 (伝未詳)

八五 我宿いはほ古は都のたつみしかぞすむよをうち山山城と人なり古はいふらん

へ古雜下 (九三三) へ

八六 みちのくのおふくま河のあなたにや人や夫わすれずの山はさかしき

へ夫雜二山 (八六七) よみ人しらず

【頭】『伊勢集』(一三三・二三三・三三三)

年ふれどいつもわれこそわすれずのはまちどりとほなきわたりけれ

八七 かた時もみねば恋しき大江山丹波なげきこえする人はよきかは

【頭】『後撰』恋六 (二〇四) よみ人しらず

あふこなき身とはしるく恋すとなげきこりつむ人はよきかな

八八 春きぬと今はいぶきの山べにもまだしかりけりける夫鶯やまぶきはな夫の聲六

へ夫春二鶯 (四〇〇) よみ人しらず・又六山吹 (二〇三) へ

【頭】契冲云「いぶき山は美濃と近江とにあり。いづれをよめるに歎」。

八九 いづくにぞ有とは聞しいは山君きがこゝろのなれるなりけり

【頭】異本に「いはき山」とあるよろし。

【万葉】四 (七三三) 家持

カクバカリコヒツ、アラズ、イハキニモナラシモノヲ、モノオモハズシテ
如是許恋乍不有者石木二毛成益物乎物不思四手

【漢書】司馬遷伝云「身非木石、独与法吏为伍」。

八九 昔わがかど近江でにしてしひえのやま心よわくはかへるいづる夫ものは

へ夫雜二山 (八五四) よみ人しらず

八九 我はために何は夫のあたこの山なれや恋しとおもふ人のいるらん

へ同 (八三三) へ

八九 世をうしと思ひ入れどもあかは大和だの山は身をこそかくさざりけれ

八九 うらみてもしるしなけれど信濃なる浅間の山のおさましや君

八九 いつからか調べの声の絶にけん琴但馬ひき山のおとの聞えぬ

へ夫雜二山 (八六七) よみ人しらず

八九 衣手の色増りつ、しなのなる位の山はきみがまに

へ代雜三 (三三三) よみ人しらず

【頭】『衣服令』云「諸臣礼服、一位深紫衣、三位以上浅紫衣、四位深緋衣、五位浅緋衣」などみえたるごとく、位高きほど衣の色こくなれば、

「衣手の色まさりつ」とはよめり。

契冲云「位山は、飛驒、信濃のさかひ也。今は飛驒に属したれど、昔は信濃に属したる事、此歌を證とすべし云々」。

八六 雨はふる道はまよひぬ山科の笠取山山城やいづれ夫こなるらん

〈夫雑二山（八三三） 読人しらず・初（一四）〉

八七 むかしみし人をぞ今はわすれゆくあふくま夫やふくろ山未のふもとばかりに

〈同（八七三）〉

八八 しるしなき物ならなくに足柄相模の山のやますげやますず恋しき

【頭】『拾遺』恋二（七〇） 読人しらず

足引の山のやま普やますのみみねばこひしき君にもあるかな

八九 あはた山こゆともこゆと思へども猶逢坂ははるけかなり河かりけり

〈夫雑二山（八七六） よみ人しらず・河関屋（三〇七）〉

九〇 山山城なり山杉のむら立おしなべて批評ラカヌこのもごとくにくるよしもがな

【頭】『古今』誹諧（二〇六） よみ人しらず

世をいとひこのもごとくに立よりてうつぶしぞめの麻のきぬ也

九一 都より西にありてふかま筑前ど山煙たえせぬ恋もする哉

〈夫雑二山（八三五） よみ人しらず〉

【頭】『重之集』（三）

春はもえ秋はこがるゝかまどやまけふりたえぬや紅葉なるらん

九二 ちはやふる神垣本山の榊葉は時雨に色もまかはら後古さらざりけり

〈後冬（四七） よみ人しらず・古本『躬恒集』（四三）〉

九三 雨ふれば三笠大和の山のこの下にぬれぬ庵もなしとこそきけ

九四 津の国のいくたの山のいくたびかわがいたづらにゆきかへるらん

【頭】『拾遺』恋四（八四） よみ人しらず

つこの国のいくたの池のいくたびかつらきこゝろをわれにみすらん

九五 人こゝろ越前あちの山になる時はちそぎりこし路しこし夫の道はくやしき

〈夫雑二山（八三〇） よみ人しらず〉

九六 つらしとても常陸ろはのやまにかくるとも我山彦きたてうらみん集になりてたづねんこたへん夫

〈同（八五五） 『素性集』（解題）〉

九七 下野やふたこの山のふたごゝろ有ける人をたのみけるかな

〈同（八四五）〉

九八 われをのみいはせ未の山にこるなげきくやしともえぬ日ぞなかりける

【頭】第四帖さふのおもひ（三八）

神山の身をうの花のほとゝぎすくやしくと音をのみぞなく

むしまろ（伝未詳）

九九 ふじのねを高めかしこみ天雲もいゆき万さりはかりたなびく物を

〈万三（三三）〉

一〇〇 すべてしも色かはらねむは常磐家なる山には秋もしられざりけり

〈新統古秋下（五六） 貫之・家（一五）〉

一〇一 かくばかりもみづる後家うつろふ色こ後家のうければや錦大和たつたの山といふらん

〈後秋下（三三） 友則・家（二六）〉

九三 見ても思ひみずても思ふ大かたは我身ひとつや物思ひの山

〈代恋三(三三六) よみ人しらず・夫雑二山(八九〇)〉

【頭】『六百番歌合』寄山恋(六二) 顕昭

年をへてしげるなげきをこりもせでなどふかからぬものおもひの山

九三 くらぶ山山城くらしと名にはたてれども妹がりといはてはよるも越なん

九四 しみ山未勘おろしの風の寒ければ風には常たつねに夫になきてこそふれ

〈夫雑二山(八九二) よみ人しらず〉

【頭】「ちるもみち葉」とある異本のかたよろし。是も例の二首を一首に

あやまれるなるべし。

永久四年百首(二七)

大進

しとみ山おろすあらしのはげしきに柴のとはそもあけぬころかな

九五 我恋はおほえの山の秋風の吹てし空の声にぞ有ける

九六 わかれてはいくらの山を越ぬれば逢ことかたくなりもてくらん

なりひら

九七 大はらや小塩山城の山もけふしこそ神世こそのこともおもひいづらめ

〈古雑上(八七)・例(三九)・大(三七)・家(I・II・III・IV)〉

九八 秋の夜の月の光しきよければ箱根箱根の山のうちさへぞてる

【頭】『古今』冬(三三六) よみ人しらず

大空の月のひかりしきよければかげみし水ぞまず氷ける

きのよしもち

九九 紅葉せぬときはの山はふく風の音にや秋を聞わたるらん

〈第一(四一九) 已出〉

一〇 梓弓但馬いるさの山は秋家ぎりのあたるごとくや色まさるらむ

〈後秋下(三七)・家(三三)〉

むねゆき朝臣(是忠親王子)

一一 しらつゆはうつしなりけり水鳥の青羽の山の色づくみれば

〈第一(一六) 已出〉

【頭】「青葉の山」、若狭、あるは陸奥などあれど、契沖が「名所にはあらざるべし」といはれたる説、よろしかるべし。

いそのかみのおとまろ(左大臣磨男)

一二 雨ふらばきんと思ひしかさの山人大和になきせそぬれはぬるとも

〈万三(三七)〉

【頭】契沖云「かさの山、すなはち三笠山をいふなり」。

山どり

人まろ

一三 くものゐる遠山鳥はつかにも河のよそにてもありとしきけばわびつゝ、ぞぬる

〈新古恋五(二七) よみ人しらず・河総角(五三)〉

一四 足曳の山鳥ののをのしだり尾のながくし夜ひとりかもねんをわか独ぬる

〈万十一(三〇)・拾恋三(七)・朗(三) 人丸・卅(八)・「人丸集」

(一〇七・二二三)〉

【頭】『万葉』七(二四三)

庭津鳥可カケノ雞乃垂尾乃乱尾乃長心毛不所念鴨オモホエヌカモ

九五 秋風のふきよるごとに山鳥の独しぬれば物ぞかなしき

〈夫雑九山鳥（二七〇）よみ人しらず〉

九六 夕ざれば君をまつちの山鳥のなくぬるを立もきかなん

〈夫雑二山（六五七）よみ人しらず〉

藤原後蔭〔中納言有徳男〕

九七 花のちることやかなしき春霞立田の山のやま鳥の声

〈古春下（二〇〇）・新拾（新撰二〇九）〉

【頭】今按ずるに、山鳥はひとりねをこそかなしませ、花のちるををしむらん事いかゞ。もしは草書にて「鶯」とありけんを見たがへて「山鳥」と書しを本にすりて、ふと此条へ入れしにや。

猿

九八 足曳の山の絶間に妻こふとしかにもまさる声聞ゆなり

〈童（八三）〉

みつね

九九 わびしらにましらな鳴そ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

〈古誹諧（二〇七）・家（一四四・三〇三・四四四・五五五）・朗（四二）〉

【頭】『翻譯名義集』畜生篇云「摩斯吒或末迦吒。此云獼猴」。

一〇〇 心あらば三たび二たび鳴声をもの思ふ人に聞せさらなん

〈家（一四四・三〇六・四四三・五五五）〉

【頭】白居易「感傷詩」云「三声猿後垂郷涙」一葉舟中載病身云云。

【芸文類聚】、引「宜都山川記」云「巴東三峡猿鳴悲發鳴三声淚霑衣」。

【是則集】（四五）

秋山のかひに三かへりなくさるをよふかく聞てそぞぬれぬる

しか

一〇一 夕ざればをぐらの山になく鹿のこよひはなかずいねにけらしも

〈万八（五二）・岡本天皇御製・又九（六四）・続古秋下（四四）・夫秋三鹿（四六）・雲秋上（四四）よみ人しらず〉

【頭】契沖云「万八「岡本天皇〔舒明〕とあるかた正し。九に雄略天皇の御製とせるはあやまれり」。

人まろ

一〇二 夏野行をしかの角のつかの間もみねば恋しき君にもある哉

〈万四（五三）・新古恋五（三三）・家（一七・二四三・三四九）・夏野条（一四）重出〉

【頭】『月令』云「仲夏之月鹿角解」。

一〇三 なく鹿の声うらぶれぬ時は今秋とやいはん萩の花さく

一〇四 妹にわがうらこひをれば足引の山下とよみしかぞ鳴なる

〈古秋上（三三）よみ人しらず〉

一〇五 たか山の峯ゆく鹿の友をおほみそでふりこぬをしると思ふな

〈万十一（四九）〉

【頭】「忘る」とありしを「志」文字にうつしあやまれるなり。

一〇六 さをしかの妻をしのぶと鳴声のいたらんかぎりなびけ萩原

〈万十（三四）〉

九七 朝道のふるみちわけて鳴鹿の立わかれにし妻や恋しき

〈夫秋三鹿(四六五) よみ人しらず〉

いせ

九八 秋山の野古に妻なき鹿の年をへてなぞやいきてのかひよとぞ鳴

〈古誹諧(二〇四) 紀よし人〉

定文
さだふ [左少将平好風男]

九九 春の野のしげき草葉の妻恋になぞわが恋のかひよとぞ鳴

〈同(二〇三)〉

【頭】此うたはきじのうた也。こゝに鹿の歌とせるはわろし。又、下の句はまたくまへの歌の下の句をふとうつしあやまれりとみゆ。

一〇〇 このごろの秋の朝げに霧の統・古本かくれ妻よぶ鹿の音のさびしやけ統・古本さ

〈万十(三四二)・続古秋下(四四) 人丸・古本『人丸集』(二二四)〉

友則

一〇一 誰聞と声たかさ挿ごにさを鹿のながくし夜を鳴あかすひとりなく後・統らむ

〈後秋下(三三三) よみ人しらず・続古秋下(五〇八) 友則・家(二九)〉

一〇二 ぬれぎぬをほすさをしかの声聞ばいつかひよとぞ鳴わたりける

【頭】今按ずるに、上に「いつ」といふうたかひの詞ありて、また「ぞ」とはいふべくもあらず。てにをはいかす也。

つらゆき

一〇三 鳴鹿は妻ぞこふらし草まくらたびゆく人に声なきかせそ

〔貫之集〕I三二・II八五

一〇四 こゝろしもかよはし物を山み近く鹿の音きけばまさるわが恋こひかな集

〈貫之集』(I四二)〉

一〇五 かりくれば萩はちりぬと小男鹿の鳴なる声もうらぶれにけり

〈万十(三四三)・夫秋三鹿(四六五) よみ人しらず〉

人丸

一〇六 足引の山より聞きせ万はさをしかの妻よぶ声もかつきかましを

〈同(三四四)・『人丸集』(I三三)〉

一〇七 棹鹿の朝たつのへ万ふすをの、秋はぎを折れぬ計もおけるしら露にたまとみるまで万

〈同八(二五九) 家持〉

【頭】『拾遺』秋(二八三) 伊勢

うつろはんことだにをしき秋萩ををれぬばかりもおけるしら露

一〇八 秋萩にしがらみかけて鳴鹿のこゑ聞つ、や山田もるらん

【頭】『古今』秋上(三三七) よみ人しらず

秋はぎをしがらふせて鳴しかのめにはみえすて音のさやけさ

一〇九 おほつかな小倉山城の山に鳴しかの声高くとも誰かしるべき

とら

一一〇 とらにのりふるやを越て青ぶちに鹿鹿万さめとりてこん釵もが万だちかも

〈万十六(三六三) 境部王〉

【頭】『晋書』周処伝云「父老嘆曰、三害未除、何樂之。有処曰何謂也。

答曰、南山白額猛獸、長橋下蛟、并子為三矣。〔中略〕処乃入山、射殺猛獸、因投水搏蛟云云。」

五 唐国の虎ふすといふ山にだに旅にはやどる物とこそきけ

五 あさぢふのをの、篠原いかなれば手飼のとらのふし所なるどなるらん夫

〈夫雑九虎（三五五）よみ人しらず〉

【頭】谷川土清云「猫、うたに「手かひのとら」ともよめり。『本草』に、「今南人猶呼レ虎為レ猫」。

五 ありとてもいくよかはふる唐国の虎ふす野べに身をもなげてん

〈拾雑恋（二三七）よみ人しらず〉

【頭】『金光明経』捨身品云「是時王子以三大悲力故、虎無能為、〔中略〕即以乾竹刺頸出血於高山上、投身虎前」。

くま

五 荒熊のすむといふなるしはせ山せめてとふともなが名はいはし山の万 駿河

〈万十一（二六六）・夫雑九（三五〇）よみ人しらず〉

むさ、び

五 ますらをの高円山にせめたれば里におち来るむさ、びの大和声これ万

〈同六（二〇二）大伴坂上郎女・同（三〇七）〉

【頭】『和名抄』毛群名云「本草」云鼯鼠（和名毛美、俗云無佐々比）。『兼名苑注』云、状如猿而肉翼似蝙蝠云云。

志貴皇子

五 むさ、びは木す多もとむと足引の山のさつをに逢にける哉ぬれ万

〈万三（二六九）〉

山川

五 山河のたぎつ心をせきかねて人のきかくなげきつるかな

〈新千恋一（二三三）よみ人しらず〉

【頭】『古今』恋五（八二）よみ人しらず

それをだにおもふこと、て我やどを見きとないひそ人のきかくに

五 こひくくてあはずなりなば山川のひともわたらぬ瀬とや成なん

五 わび人の袖をやかれる山河の涙のごともおつる滝かな

〈『貫之集』（一四三）〉

五 さを鹿のつめだにひちぬ山かはのあさましきまでとはぬ君哉

〈拾恋四（八〇）よみ人しらず〉

【頭】『兼盛集』（一三六）

さざれいしの上もかくれぬさは水のあさましくのみ見ゆるきみかな

五 水まさる時はふちなみ山川の滝ならねばや音のたえせぬ無

〈第三（一三三）重出〉

五 ことばかりよらせよ妹よやま河のたての乱てたゆたへる君無

【頭】柩本に「たき」とあるよろし。一首の意は、山川のたきのみだれてたゆたへるとき妹なれば、まごことにはあふまじくとも、たゞ言ばかりもよせよかし、とよめる也。「よらせよ」はよせよ也。

山田

五 足曳の山田作るをいえずとものいねはひてすとも持・古つな持・古かね万・古

〈万十（三三九）・『家持集』（一八九・二三七）・古本『人丸集』（二二四）

夫秋三秋田（五〇五）〉

六五 あし引の山田にはへるしめ縄の秋田刈までたえじとぞおもふ

六六 ことゝては誰ならなくにを山田の苗代水のなかよどみするにして万

〈万四(七表) 紀女郎〉

六七 かりてほす山田のいねのこきたれてねをなまこそれたれ秋のうければ古こそなかめ人はうらみじ

〈古雑上(九三) 是則・集(三三)〉

【頭】『古今』恋五(八〇七) 典侍藤原直子朝臣

あまのかるもに住むしのわれからとねをこそなかめ世をばうらみし

六八 山田さへ今はつくるを散花のかごとは風におほせざらなん

〈新勅春下(九〇) 貫之・家(一六・二四)〉

【頭】『公任卿集』(二〇二)

露をおもみをれふしにける花のえはかごとを風におほせざらなん

みつね

六九 かりてほす山田の稲をかぞへつ、おほくの年をつみてける哉道しつる代

〈代秋下(二〇七) 家(I二五・II九・III九・IV五五・V四)〉

七〇 遠山田もるや人めのしげ、ればほにこそ出ね忘やはする

〈続古恋一(九六) 門条(三三七) 重出〉

【頭】契冲云「門の条に「かどわさ田」とあるかたまされり。「遠山田」にては人めしけかるまじければ也」。

忠岑

七一 山田すき春の種をば蒔しかど秋の時にはなさじとぞ思ふ

七二 やま陰につくる山田むせのみ新の木がくれてほに出ぬ恋に身をつくさん新はくるしかりけりぞわび 貫

〈新勅恋一(六四) 躬恒・『貫之集』(一五五)〉

【頭】第六帖(三七三) しのす、き

秋風はや、ふくのべのしのす、きはに出ぬ恋はくるしかりけり

七三 白露あせ古のおくての山田かり初にうき世の中を思ひぬるかな

〈古哀傷(八四) 貫之・集(一七五・三三)〉

【頭】『重之集』(二七四)

しら露のおくてのいねも出にけりかりくる風はうべもふきけり

山里

七四 山ざともおなしうき世の中なれば処かへてもすみうかりけり

七五 やま深き宿し集にはあれとよとばとしこと集、もに春の心は浅くぞあるらしはな集

〈『貫之集』(一三五)〉

七六 春たて古万後くれど花もにはほはぬ山里は物うかるねに驚や万ぞなく

〈古春上(二五) 在原棟梁・寛(二七)・新万(一九)・後六(二七)〉

【頭】『後撰』夏(二二三) 藤原雅正

花鳥のいろをもかをもいたづらにもものうかる身はすぐすのみなり

七七 ゆきやどりしらく集べもだにも通はずは此山里は住よ集うからまし

〈『貫之集』(一〇〇)〉

七八 雪のみやふりぬは新集と思ふ山ざとは我に新集もおほくの年つもれ新ぞへにける

〈同(一四四) 新古今(六七)〉

九六 たちぬとは春をきけども山里は待遠にのみ花は咲けれ

〈同（一三五）〉

【頭】『兼輔集』（一四・二五・三三・四）

やどちかくうつしてうゑしかひもなくまぢどほにのみ匂ふはなかな

九七 山里に住かひあるは梅の花見つ、うぐひす聞にぞ有ける

〈同（一四二）〉

九八 やまざとは秋こそことにわびしけれ鹿の鳴音にめをさましつ、

〈古秋上（三四） 忠岑・家（一五・二九・三三・四三）〉

九九 山里にしろ人もがなうぐひすの鳴ぬときけはわれにつぐへく

〈拾夏（九） 貫之・亭（四） 興風〉

一〇〇 あられふるみやまの里のかなしきはきてたはやすくとふ人もなき

〈後冬（四八） よみ人しらず〉

【頭】『源氏』末摘花巻云「なみくのたはやすき御ふるまひならねば云々」。

一〇一 山里は冬ぞさびしき増りける人も草もかれぬとおもへば

〈古冬（三五） 源宗于・家（五） 朗（五四） 州（九七）〉

一〇二 住わびぬ今はかぎりぞ山なりひらざとに爪木なりひらこるべき宿もとめてん

〈後雜一（一〇三） 伊（一〇七） 家（一六・二九・三五・四三）〉

山の井

一〇三 浅香山山奥かげさへみゆる山のあのあさくは人をおもふものかは

〈万十六（三〇七） 葛城王・大（三〇） 夫雜二山（六八）〉

【頭】契沖云「後の人、あらためて時にかなへたる也。」「あさくは人を」のあたり、古歌の体にあらず」。

『古今』序云「なにはづのうたはみかどのおほんはじめ也。あさか山のことのはは、うねめのたはふれよりよみて、この二うたは歌のち、は、のやうにてぞ、手習ふ人の始にもしける云々」。

一〇四 むすぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人にわかれぬるかな

〈古離別（四四） 拾雜恋（三三） 新撰（二七） 家（一六・二九）〉

【頭】『翻訳名義集』諸水篇云「阿伽〔此云水〕」。

一〇五 くやしきぞ汲もめてける浅河ければ袖のみぬる、山のの水

〈河若紫（七）〉

【頭】『源氏』若紫卷（五）云

くみそめてくやしと聞し山の井のあさきながらやかかけをみすべき

一〇六 出いへながらわかる、ときは拾家るからわかと聞ば山の井のにこりしよりもわびしかりけり

〈拾雜恋（三三） 貫之・家（一五）〉

一〇七 浅からんことをだにこそ恨おもひ統みしかたえやはつべき山のの水

〈続後恋五（九九） 興風〉

一〇八 めづらしや昔ながらの山のゐは沈める影ぞくちはてにける

〈後雜一（一三五） 小きかぜ

山びこ

伊勢

【頭】今按するに、「ひこ」はひゞきの急語なり。『万葉』九(二七)に「足日木乃山響令動」と見ゆ。「響」を「ひこ」とよめるはもと「ひゞき」なれば也。又八(六〇六)に、「山妣姑乃相響左右」と真仮字にも書り。

『譚子化書』大舍篇云「谷非_レ応_レ響也。而響自満_レ之」。

九一 山彦は声のいほりのなればやおもふくといへどこたへぬ

九二 つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまでなげきつる哉

〈古恋一(五三) よみ人しらず・寛(二四)・新万(二〇五)〉

つらゆき

九三 山彦の声のまにくたつねゆけばむなしき空を行やつかれん

九四 やまびこは君にぞ有らし心みにわかとひやめば音信もせず

〈拾恋一(六四) よみ人しらず〉

九五 よも山のやまの山彦なければや我よぶ声にこたへだにせぬ

九六 あふことの山彦にしてよそならば人めわれはよきぞ有まし

〈『貫之集』(一五五)〉

九七 うちわびてよば、ん声に山彦のこたへぬ空はあらじとぞ思ふ

〈古恋一(五五)・後恋五(六九) よみ人しらず・古本『貫之集』(陽明文

庫本六五)〉

九八 鶯のなくねをまねに山彦をことありがほにもとめつるかな

【頭】『後撰』恋一(五六) よみ人しらず

みる時はことぞともなくみぬときはことありかほに恋しきやなぞ

九九 山彦のよそにこたへし声なれどこと、ひしこそうれしかりけれ

〈『伊勢集』(一三六・二二六九・三三七)〉

家持

一〇〇 やまびこのあひとよむまで妻こひに鹿鳴山に独のみして

〈万八(二〇三)〉

一〇一 いづかたにわれまどへとか山びこのこたへしかたに音信もせぬ

いはほ

一〇二 いかならんいはほの中にすまはかは世のうき事のたづねござらむ

〈古雑下(九五) よみ人しらず〉

【頭】『四不可得経』云「人則計竊至大山」無人之処摩_レ山両解入_レ中還合無常之对安知_二吾処_一」。

一〇三 三よしの、岩きりとほし行水の音にはたてじ恋はしぬとも

〈同恋一(四九)・『家持集』(一三三・二二九七)〉

【頭】『万葉』十一(二七二) 高山之石本瀧千逝水之音尔者不立恋而雖死

一〇四 あま衣なづばちとせのいはほをも久しき物とわが思はなくに

【頭】『增壹阿含経』第五十云「大石山縦広一由旬、高一由旬、設有_レ人来、手執_二天衣_一百歳一抔」。

105 いかばかり久しくもあらず天衣をとめがなづる岩計なり

いせ

106 岩の上をすみかにしたる芦たづは世をのどかにも思ふべきかな家は

〈家（I一六・II二五・III一八）〉

貫之

107 苔ながら生るいはほは久しくて君にくらぶる心あるかな家は夫

〈家（I一四・II三三）・夫雑十苔（III三三）〉

峯

みつね

108 しがらきのみね立かくす春霞はれずも物を思ふころ哉

〈第一（六〇）已出〉

【頭】『続千載』恋四（四三） 是則

秋山に朝たつきりのみねこめてはれずも物をおもふころかな

109 白雲のたえずたなびく峯にだに住ばすみぬる世に社有けれまる、よにぞける 貫

〈古雑下（四五） くれたかのみこ・古本『貫之集』（陽明文庫本五五七）〉

つらゆき

110 秋風の吹にし日より音羽山みねの梢もいろ付にけり

〈古秋下（二五）・第六（四〇七）重出〉

谷

111 鳥のねもきこえぬ谷の埋木はわが人しれぬなげき成けり谷は

〈『貫之集』（I六五）〉

深養父

112 光まつ谷には春もよそなれば咲てとく散る物思ひもなしなま古・新

〈古雑下（九七）・新撰（二五二）〉

【頭】契沖云「物思ひもなし」とは物思ひの花もなしと也。花によりてはさくを待、散るををしむとて物思ひとなれば、やがて花にも思ひといふ心をおほせたるにこそ。」

113 あさか山霞の谷しふかければ我もの思ひははる、よもなし陸奥 童

〈夫雑三（九三）よみ人しらず・童（一八八）〉

【頭】『貫之集』（I八三）

草も木もふけばかれぬる秋風にさきのみまさる物おもひの花

そま

114 宮木ひくあづさの柚にたつ民のやむ時もなく恋わたる哉山城 夫

〈新勅恋三（七三）よみ人しらず・古本『人丸集』（II三三・III三三）・夫雑三（九二）〉

雑三（九二）〉

115 いかだおろす柚山河のみなれ棹さしてくれどもあはぬ君かな

〈同（七二）〉

116 柚やまにたつ杉くれのおもてく人にひかる、君はたのまじ

【頭】契沖云「くれ」は木きれの約語にや。『三代実録』に「榎樽」とみ

ゆ。これ「すぎくれ」なり。『後拾遺』雑二（九五）に、

浅きせをこすいかだしのつなよわみなほこのくれもあやふかり覺

是は「暮」をかねてよめり。

『実頼集』（『頼実集』五〇）

おいせじとおもてくにごへども霜いたゞけるしらぎくの花

「おもてく」は俗にメンくといふ意也。

一〇七 まき柱つくる柚人いさ、めのかりほのためと思ひけんやは

〈万七(三五)〉

一〇六 みや木ひくいづみの柚にたつたみのやむ時なくひわたるかも万もなし我こふらくは

〈同十一(三四)〉

をの、え

一〇九 をの、えはくちなばまたもすげかへんうき世の中にかへらずもがな

〈河松風(三三)〉

とものり

一〇〇 故郷は見しごともあらず斧のえの朽し所ぞ恋しかりける

〈古雑下(九二)・新撰(三五)・家(五)・新朗(五〇)〉

【頭】『述異記』云「信安郡有石室。晋時、王質伐木至見童子数人碁而歌。質因聽之。童子以一物与質如棗核、質含之。不覺饑、俄頃童子謂曰、何不_レ去。質起視斧、柯爛尽。既帰、無復時人。」

一〇三 富士の山なげきこるてふをの、えのほとくしくもなりしほど哉

【頭】『拾遺』雑恋(三三)

みやつくるひだのたくみのてをの音ほとくしかるめをみしかな

すみがま

【頭】白居易売炭翁詩云「売炭翁伐薪 烧炭南山中 满面塵灰煙火色 兩鬢蒼蒼十指黑」などみえて、炭やくことはもろこしにてもふるくよりあれど、「すみがま」とよみたるうたは『万葉』『古今』にはたえてな

し。大原山、小野山など名所にて、後にはおほくよめり。

一〇三 谷ふかく焼炭がまの煙だにみねの雲とはならぬものかは

〈続詞恋上(四九)・代冬(五三)兼盛・家(一八)〉

一〇三 ときは木を猶は、き木をみかすみに元すみがまにこりくべて絶し煙の空に立名元なば

〈元良親王集(九)〉

一〇四 ながめつ、世にすみがまの我人も下にもゆとも誰かしるべき

まとの左大臣〔此名誤れり〕

一〇五 人めだにみえぬ山路べいに立雲をたれすみかまの煙といふらん

〈後雑四(三三) 北辺左大臣〉